

## 門川町の未来

五十鈴小学校 五年 井上 蒼介

ぼくは、門川町で生まれて、門川町で育ってきた「門川っ子」です。ぼくは、よく休みの日に、家族で魚つりをします。門川の手でつれたカワハギをに付けにしてもらったらとてもおいしかったです。昔、門川町を通り過ぎると魚のにおいが立ちこめていて、「魚のまち」と言われるようになったと聞きました。ぼくは、そんな門川町が大好きです。この門川町をもっとよくするためにはどうすればよいのか考えました。ゴミ拾いをして町や海をきれいにしたり、門川町が有名になるようによいところをアピールしてたくさんの人に来てもらったりすることもあると思います。でも今のぼくができることは何か考えたときに、一つよい方法が浮かびました。それはあいさつです。

「おはよう。」「行ってきます。」「ただいま。」「おやすみなさい。」

これはぼくが毎日家でしているあいさつです。ぼくの家では、お父さんもお母さんも弟もあいさつをします。あいさつをしないと、

「なぜ、あいさつをしないの。」

としかられます。あいさつは、ぼくの家では当たり前です。このあいさつが門川町でも当たり前になると、門川町はもっとよい町になると思います。ぼくは、みんながあいさつでつながる町は、笑顔いっぱい町の町になると思います。

先日、友達の家に遊びに向かっていると中におじいさんがいました。ぼくは、そのおじいさんにあいさつをしましたが、返してくれませんでした。その時、ぼくは、とてもいやな気持ちになりました。そのことをお父さんに話をしたら、

「もしかしたら、そのおじいさんは、あいさつが聞こえなかっただけかもしれないよ。だから、次に会った時は、大きい声で、笑顔であいさつをすると気持ちが伝わるよ。」  
と言ってくれました。ぼくは、その話を聞いて、あいさつは、言葉だけでなく、表情で伝えることも大事なのだなと思いました。

また別の日に、友達と自転車で公園に行っていたら、道の向こうから来た人にとつぜんあいさつをされました。その時、ぼくは、とつぜんだったので、あいさつを返すことができませんでした。ぼくはその時、おじいさんがあいさつを返してくれなかったことを思い出しました。ぼくもいやな気持ちがあったので、道の向こうから来た人もいやな気持ちがあったのかなととても後悔しました。

ぼくは、あいさつには、いろいろな効果があると思います。例えば、あいさつをすると相手との絆を深めることができそうです。また、あいさつをしたり、返したりすると、うれしい気持ちやふくらみます。その気持ちを他の人に伝えたりすると、うれしい気持ちやつながって、温かいふんわりをつくることもできます。さらに、あいさつをされると、自分に自信がもてます。自信をもつことで、とてもうれしくなります。

そのような、不思議な力があるあいさつで、門川町を

いっぱいにするために、ぼくは、六年生になったらやりたいことがあります。それは、あいさつを呼びかける運動です。五十鈴小学校では、六年生が毎日ボランティア活動をしています。ぼくは、六年生になったら、校門の下足室の前に立って、あいさつ運動をしたいと思っています。また、委員会活動の中で、五十鈴小学校があいさつでいっぱいになる活動をしたりと考えていきたいと思っています。理由は、門川町をあいさつでいっぱいにするために、まずは、ぼくが通っている五十鈴小学校をあいさつでいっぱいにするのとよいと思ったからです。この活動によって、五十鈴小学校のみんなが家や地域であいさつをしていけば、それが他の人に伝わって、門川町全体に広まっていけば、宮崎県全体に広まってくればいいなあと思います。だから、ぼくは、中学生や高校生、大人になっても、相手が気持ちよくなるあいさつを続けていきます。

門川町の未来を作っていくのは、ぼく達です。大人になつてからがんばるのではなく、今、自分ができることも積み重ねて、大好きな門川町をもっとすばらしい町にしていきたいです。

---